

令和3年 4月 30日

2020年度授業アンケートの評価について

新型コロナウイルスの世界的流行により、2020年度の授業実施環境は例年とは大きく異なるものとなった。多くの授業が4月以降にオンラインへと急遽移行し、学生はもとより授業を行う教員もまた慣れない授業環境に苦闘した1年であった。このような状況にあつて、1学期に関しては授業アンケートを実施することが困難であったため、中止することとした。また2学期に関しても、授業の実施形態が多岐に渡った（同時配信、オンデマンド、一部対面等）ことを受け、アンケートの実施も任意とした。そのため、回答は17科目に留まった（例年は40科目前後）。従つて、本年度は過年度との数値の比較等は行わず、報告として本アンケート結果を公表する。

シラバスに関連する設問1～3すべてにおいて、「強くそう思う」、「そう思う」との回答は95%以上に達していた。また、設問5～10における教員の説明、話し方、学生との双方向コミュニケーションなどに関する設問においても、90%以上の学生から肯定的な回答（「強くそう思う」、「そう思う」）が得られている。これらのことから、コロナ禍で授業形態が大きく変化する中においても、概ね例年と遜色のない授業を提供できたことが推察される。

「授業への出席率（設問11）」に関しては、回答数が例年に比べて限られているとは言え、全ての学生が授業に少なくとも80%以上出席したと回答していることから、オンラインでの受講環境が学生の修学にプラスに働いた可能性が考えられる。この点は、新型コロナウイルスが終息した後の授業形態のあり方への示唆も含んでいると言えよう。

「授業が満足できるものであったか（設問15）」との問いに対して「強くそう思う」、「そう思う」と回答した学生の割合は97.1%に達しており、否定的な回答（「そう思わない」、「全くそう思わない」）はゼロであった。また、「授業による知的刺激、さらなる勉学意欲（設問14）」等も肯定的な回答が93.4%を占めていた。

以上から、未曾有の状況下で難しい授業運営を求められる1年であったものの、少なくとも例年と同程度の質を保った教育が提供できていたと考えられる。2020年度に得られた様々な経験を活かすことで、いまだ新型コロナウイルスの終息が見通せない中でも本学院での教育が学生にとって有意義なものとなるよう努めていく所存である。

北海道大学大学院環境科学院

学院長・教務委員会委員長・教授 大原 雅

執行部室・特任助教

川西 亮太